

2018年10月7日の説教（要旨）

聖書 ローマの信徒への手紙 4章 18～25節

説教 「望みなきところで望み」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ローマの信徒への手紙4章はアブラハムづくしの章です。パウロは、人はみな信仰によってのみ神に義と認められるのだということを語ってきたのですが、それは今に始まったことではなく、聖書が最初から書いてきたことなのだとすることをアブラハムの物語を通して論証しているのです。

パウロはアブラハムの信仰について、「彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて信じ、・・・多くの民の父となりました」（18節）と語ります。「希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて信じ」たということは、口語訳聖書では「彼は望み得ないのになおも望みつつ信じた」と訳しています。ここで最初に出てくる希望という言葉の前についている前置詞は、「超えて」とか「逆らって」という意味があります。それで宗教改革者カルヴァンは、この箇所を「望みにさからって、なお望みにおいて信じた」と訳しています。

希望するすべもなかったとき、望みにさからって、とあるように、アブラハム夫妻には実の子どもはまだ与えられておらず、すでに高齢となっていたのです。「そのころ彼は、およそ百歳になっていて、既に自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せないと知りながらも、その信仰が弱まりはしませんでした」（19節）とあります。現実を彼は見据えていました。この世的な望みと言うことならば、もうあきらめたほうがよいという状態でした。それにもかかわらず、なお神が約束されるから、彼は人間的な見通しは全然立たないけれども、神を見上げることをやめなかったのです。

聖書の中には、そのように神に望みをおき、神を信じて立った人のことが出てきます。たとえば、クリスマス物語で天使から突然の受胎告知を受けたマリアは、「どうしてそのようなことがありえましょうか」と言い、しかし天使の「神にはできないことは何一つない」という言葉に、「お言葉どおり、この身になりますように」と言いました。あるいは、難病に苦しむ自分の息子を主イエスのところに連れて来たある父親は、これまでもいろいろ手を尽くしてきたがどうしようもなかっただけに、主イエスに「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください」と懇願しました。すると、主イエスは「『できれば』というのか。信じる者には何でもできる」と言われ、その父親は「信じます。信仰のないわたしをお助けください」と叫んだのです。

人間的な可能性ということなら無いと言わざるをえないところで、あるいは、あなたは本当に信じているのかと言われたら、信じているとはとても自信をもって言えないようなところで、なお神さまに対して「お言葉ですから」と言い、神さまの御業にゆだねていくのが、ここで言われている信仰であり、信仰者の希望なのです。

希望という言葉は世の中にもあふれています。たいへん好ましい言葉として使われて

います。ですから私たちも、ともすればこの世の人々と同じような人間的な希望ばかりを考えていないでしょうか。すなわち、自分がちょっとがんばって、うまくやれば手の届く範囲のことだけを希望として考え、それを手助けしてくれるか、後押ししてくれることを神さまに期待し、そんな願いをかなえてくださる神さまだけをイメージしていることが多いのではないのでしょうか。けれども、もしそうであるなら、その神さまは私の願いをかなえてくださるだけのちっぽけな神さま、偶像の神さまとなっているのではないのでしょうか。私たちは、私たちの思いを超えて神の国の御業を進めていかれる神を信じ、その神の約束に望みをおく者です。「見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお待ち望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです」(8:24~25)。

パウロが4章でこのようにアブラハム物語を振り返ってきたのは、ただ信仰の父アブラハムを思い起こし、やっぱりアブラハムの信仰は偉大だったのだということを確認するためではありません。パウロが言いたいのは、アブラハムがこのような信仰に生き、このような信仰によってアブラハムが義と認められたように、今ここに生きる私たちも、ユダヤ人あれ、異邦人であれ、ただイエス・キリストを信じる信仰によって義とされるのだということです。

「アブラハムは自分の体が衰えており、妻の体ももう子を宿せないと知りながら、その信仰が弱まりはしませんでした」(19節)というところは、原文ではどちらも「自分の体が死んでいること、サラの胎も死んでいることを認めながら」と、「死ぬ」という単語が使われています。死はこの世の望みが尽き果てるところです。だが、その望みが消え去るところで、望みをいだいて信じたのです。

この世の望みの尽き果てるころ、人間の望みを超えて、死者を生かされる神を信じてアブラハムは生きました。その信仰を神は義と認められました。その信仰とは、私たちにとっては、主イエス・キリストを私たちのために十字架につけ、死者の中からよみがえらせてくださった方を信じることだとパウロは言うのです。

罪の中に死んでいる私たちは、自分の力でそこから救われることはできません。私たちの罪からの救いはアブラハムとサラに子どもが生まれることよりももっと難しいことでした。死者の復活と同様に不可能に近いと言わざるを得ないことでした。しかし、不可能を可能とされる神が、御子の十字架の死と復活によってそれを成し遂げてくださったのです。「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡されわたしたちが義とされるために復活させられた」(4:25)のです。